The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 卒業生の授業評価にみる人間科学部の過去/現在/未来 |
| Author(s) | 厚東, 洋輔 |
| Citation | 年報人間科学. 2008, 29-2, p. 91-102 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/5891 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（資料）

# 卒業生の授業評価にみる人間科学部の過去／現在／未来

厚東　洋輔

**解題**

人間科学部の創立一〇周年を記念して、人間科学部卒業生全員に対してアンケート調査が実施された。卒業生の現状を知り、さらにまた人間科学部の教育について意見を求める、というのが調査の趣旨であった。調査対象になったのは一期から六期までの卒業生全員、当時の入学定員は一〇〇名だったので卒業生数の上限が六〇〇名、調査票の回収率を考慮して、そのうち国内在住者に限ったので五一九名が調査対象者となった。その全員に調査票を郵送したのが、一九八一年の一〇月、返送された回答が二三〇通、回答率は四四・三％であった。

卒業生の現状に関しては、『卒業生の進路と現状』というタイトルで報告書が一九八二年に刊行された。そのあと、人間科学部の教育システムについての意見については、とりまとめに結構手間取り、二年後の一九八四年三月に、『人間科学部に対する卒業生の意見』というタイトルで、調査報告書がようやく公刊されている。

『人間科学部に対する卒業生の意見』は、全二六ページの小冊子で、目次は次の通りである。

＊＊

1　はじめに（1）
2　調査の概要（1）3　調査結果のまとめ（1）
3―1　学部　、系の選択（3）
3―2　授業に対する満足と不満（6）
3―3　授業評価の客体的条件（9）
3―4　授業評価の主体的条件（12）

3―5　現在の状況と授業評価（14）
3―6　学生生活の諸面（16）
3―7　学生生活の印象（22）
3―8　学部と後輩に望む（23）
4　終わりに（26）

＊＊

調査は麻生誠教授をヘッドに、教官からは、吉田光雄、友田泰正、厚東洋輔、浜日出夫の諸氏が、事務からは太田知子さんが、実働部隊として動員され、調査票の作成、調査の実施、調査報告書の作成などの実務にあたった。

厚東洋輔は、3―2の「授業に対する満足と不満」から3―5の「現在の状況と授業評価」までを執筆している。

報告書の執筆は、事前の打ち合わせや事後のチェックも行われること無く、おのおのの才覚に従い独立に自由に行なわれている。ただデータの集計からクロス表の作成、検定等の数量的処理については吉田先生がすべて行ってくださった。

試験期間のある日、プリントアウトした分厚い資料が研究室にどさっと届けられ、質問項目＊＊から質問項目＊＊までを分析してください、締め切りは＊＊です、と麻生先生から命ぜられ、数冊に分かれたデータ表を（いやいや？）手に取り、見始めたと記憶している。しかし書き始めたら、結構興に乗り、なかなか書き終えることができず、全体としてかなり分量になってしまった。他のテーマの論考に比べてアンバランスなほど多いにも関わらず（一〇ページ分、報告書の三八・五％）、そのままの形で掲載された。

私に与えられた課題は、受講者の授業評価をもとに、学部の教育体制の組織としてのパーフォーマンスをどう評定するかというものであった。現在の大阪大学の評価システムの言葉を用いれば、人間科学部の教育について、「個人評価」と対比される意味における「組織評価」を行うことが求められたのである。

授業評価を行い、それを分析するというのは、現在では「ポピュラーな」テーマであるといえようが、当時としてはお手本にする先例もなく、分析にはかなり苦労したのを今でもよく覚えている。とりわけ、受講者が低く評価した場合、その数字をどう理解し、そこからどのような処方箋を引き出すかについては、自分なりに知恵を絞った。

調査報告書は、学部内においてすら広く読まれたとはいいがたく、感想やコメントのたぐいを聞いた覚えは無い。私自身、分析した細かい内容については、忘れてしまっていた。

国立大学の法人化とともに、副学長の統括する室体制が整備され、私が「評価広報室」の室員に任命されることになった。大学のアクティビティを評価しようとすると、「授業評価」という問題を避けて通ることが出来ない。そういえば昔こうしたテーマについて考えたことがあるなー、と思い出し、古い報告書を探し出し、読み返してみた。

人間科学部の制度について、ある程度の知識（ローカルノリッジ）が無いと読みづらいことも確かだが、受講者の「授業評価」の意味

するところを多角的にとらえようとする分析視角、あるいはまた授業評価から組織評価を導きだそうとする議論の組み立てなどに関しては、当時としてはそれ相当に考えられており、一般の人が今読んでも、それなりに面白く読めるのではないかと思った。むろん専門外のテーマで苦労したというセンチメンタルな理由から、自己評価が甘くなっている危険性も排除できないが。

今や入手しがたくなった報告書については、比較対照のデータとして、全体を復刻するのがベストであるという意見もあるだろう。「授業評価」を実施した場合、そうしたデータをもとにどう分析を進めたらよいのか、という今日的論点との関わりをよりはっきりと示すために、私の執筆部分のみを取りまとめ、「資料」として提示することも、あながち無意味ではないだろうと、思うに至った。

「卒業生の授業評価にみる人間科学部の過去／現在／未来」というタイトルは、現時点で厚東によって仮につけられたものであるが、本文については、一切、加筆修正されることなく、報告書の六ページから一五ページまでが、そのままの形で再録されている。（ただし、章の番号は、読みやすさを考慮して、1、2、3、4に変更されている。図および表の番号はそのままでも混同されることが無いので、変更しなかった。）

二〇〇七年九月一〇日

（解題終わり）

## 1　授業に対する満足と不満

人間科学部の学生は、石橋キャンパスで二年の前期課程をおえてから、吹田キャンパスに移り、二年間専門課程を学ぶ。前期課程（教養部）の授業についての評価をたずねたところ、七%がよかったと思い、五一%がどちらかといえばよかったと思い、三九%がよくなかったと思っている。（問2）。これに対し後期課程の授業については、よかったと思っている〈満足層〉が二五%、どちらかといえばよかったと思っている〈まあまあ層〉が六一%、よくなかったと思っている〈不満層〉が一四%という回答がよせられている（問9）。前期にくらべて後期の方が授業満足度が高いのは一見にして明らかであるが、満足度の上昇はどの程度のものといえるだろうか。

前期と後期、この二つの課

**表3　前期と後期の授業評価の相関**

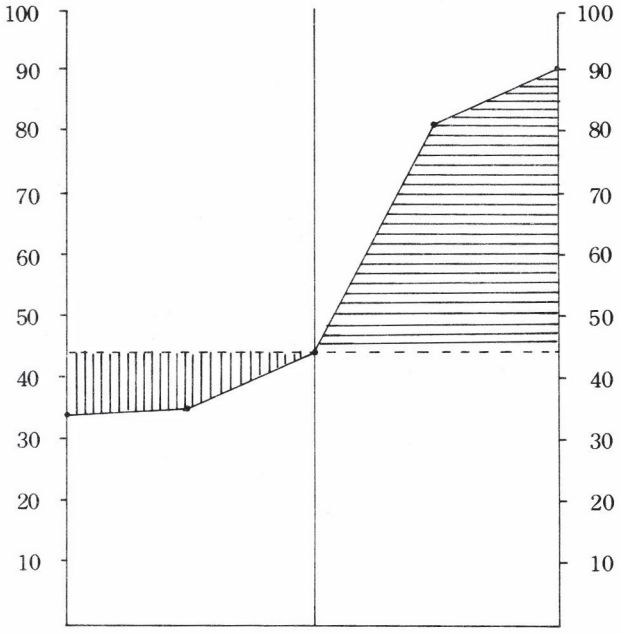
| 評価下降 | | 現状維持 | 評価上昇 | |
|---|---|---|---|---|
| −− | − | | + | ++ |
| 0.5 | 9.2 | 44.4 | 36.7 | 9.2 |

++　前期不満 → 後期満足
+　前期不満 → 後期まあまあ，前期まあまあ → 後期満足
−　前期満足 → 後期まあまあ，前期まあまあ → 後期不満
−−　前期満足 → 後期不満

程の授業評価をクロスさせてみよう。両者の関連の仕方には三つのタイプがあるだろう。すなわち、a・現状維持型（例えば前期満足層から後期満足層へ）b・評価上昇型（例えば前期不満層から後期まあまあ層へ）c・評価不降型（例えば前期満足層から後期不満層へ）、以上の三つのタイプである。タイプ別に相対度数を求めると表3のようになる。

表1を図表化した図6をみてみよう。評価の上昇したひとの大きさは横線部で、下降したひとの大きさは縦線部で表わされているが、面積は明らかに前者の方が大きい。つまり後期の授業は、授業に対する満足度の上昇に貢献している。人間科学部の教育課程は、後期においてそれなりに改善されているといえるかもしれない。しかし、こうした後期課程の「教育効果」にもかかわらず、授業に対する不満は決してなくならない。こうした不満の存在は何に由来するのだろうか。授業に対する不満の原因は何か、この点に焦点をしぼってよせられた回答をみていくことにしよう。

**図6　後期の授業満足度効果**




また男女の相違によって授業の満足度は異なるだろうか。表4によれば、女性の方が若干満足度が高いことが読みとれるものの、全体としては、性別は授業評価に対して有意な影響力をもってはいないことがわかる。

**表4　性別と授業評価**

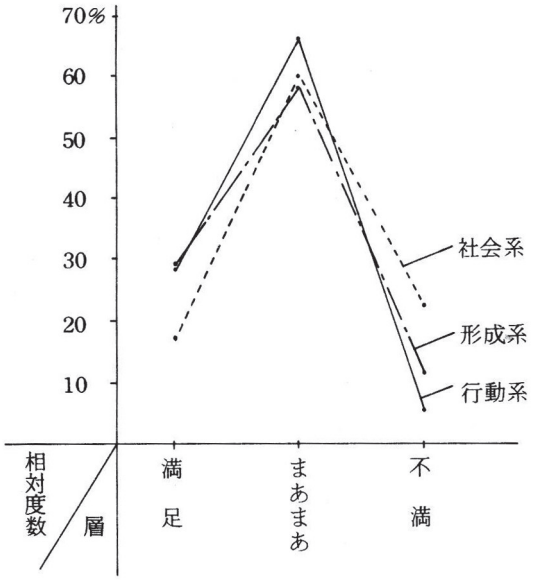
| 層＼性別 | 男 | 女 |
|---|---|---|
| 満　足 | 21.5％ | 28.8％ |
| まあまあ | 60.8％ | 62.5％ |
| 不　満 | 17.7％ | 8.6％ |

$X_0^2 = 0.864$
$P > 0.50$

人間科学部では後期課程に進学する際、行動、社会、形成の三つの系のうち一つを選ばねばならない。三つの系のうちどこに属したかによって授業に対する満足度は異なるだろうか。図7をみてみよう。行動系は不満層が他の系に比し最も少なく、強弱の差はあるものの九四％の者が授業に対し満足している。形成系では、満足か不

満か授業に対し、はっきりとした評価が下されており、まあまあ層はもっとも少ない。グラフの両端である満足層と不満層を比較してみよう。行動系と形成系では、満足層が不満層をそれぞれ五倍、二・四倍と上まわっているのに対し、社会系ではこの比率は逆転し、満足層は不満層の八割に止っている。全体として授業満足度をみてみると、行動系が最も高く、形成系が二番、社会系は最も低いといえるだろう。

**図7　所属した系と授業評価**




$X_0 = 10.751$
$P < 0.05$

所属した系によってどうして満足度にこのような相違が生ずるのだろうか。そのメカニズムはかなり複雑と思われる。というのは、授業に対する評価は、教師のあり方や授業内容ばかりでなく、進学する学生の関心のあり方にも大きく影響され、教育の送り手と受け手の相互作用の結果、系の雰囲気は形作られると思われるからである。授業に対する不満の根源を明確な形で抽出するには、規定要因を送り手――客体側要因（例えば授業内容のあり方）と受け手――主体的要因（例えば学生の勉学意欲）の二つに分解し、そのそれぞれをもう少し緻密に追求する必要があるだろう。

## 2　授業評価の客体的条件

まず客体的条件の面からみていこう。講義、演習、実験実習という授業形態の相違は、授業満足度にどのような影響を与えるだろうか。三つの授業形態のうちどれを多くすべきかについて意見を求めたところ、表5のような結果をえた（問5）。人気のあるのは演習と実験実習で、合わせると七割のひとがこの授業形態を多くすべきだと答えている。これに対し講義形式は全く人気がない。こうした授業形態に対する好みと授業満足度をクロスさせてみよう。当時のままでよいと答えているのは不満層では、さすがにわずか三％（一

人）であるのに、満足層では二八％、まあまあ層では二〇％にのぼっている。授業満足度が高まるにつれ現状肯定性はあらわとなる。注目すべきは、この当時のままでよいと答えているひとを除外すれば、講義が嫌いで演習・実験実習を好むという授業形態の選好パターンは、満足層、まあまあ層、不満層の間でほぼ同一である。講義形式の過剰が学生全般の勉学意欲をはなはだしく低下させているといえよう。講義形式への嫌悪が、前期課程に対する強い不満の大きな原因の一つであろう。

次に授業の内容は満足度にどのような影響を与えるかを見てみよう。自らが学んだ授業に不満なのは、それがプラクティカルな内容でないせいだろうか。学部で学んだことが職場で役立っているかどうかを訊ねたところ、一四％がかなり役立つ、三七％が少し役立つ、三二％が役立たないと答えている（問15―4）。職場での有用性に関し3割余りのひとがきびしい評価を下している。有用性の評価と授業満足度をクロスさせてみよう。図8によれば、授業に関する満足層と不満層はほとんど同じ曲線を描いている。大きな相違はまあまあ層という中間層と、不満層、満足層という両極端の間にある。学部で学んだことの無効性を一番信じていないのが、なんと不満層である。職場で役立たないから授業に不満を抱いているわけではない。授業の評価基準はもっと別のところにあるようである。大学と職場を短絡させる程彼らは幼くはない。

**表5　授業形態と授業評価**

| 層＼多くすべき授業形態 | 講　義 | 演　習 | 実験実習 | 当時のまま | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 満　足 | 0.9％ | 5.2％ | 8.6％ | 6.4％ | 2.1％ |
| まあまあ | 0.4％ | 26.6％ | 20.2％ | 12.4％ | 3.0％ |
| 不　満 | 0％ | 4.7％ | 4.7％ | 0.4％ | 4.3％ |
| 計 | 1.3％ | 36.5％ | 33.5％ | 19.2％ | 9.4％ |

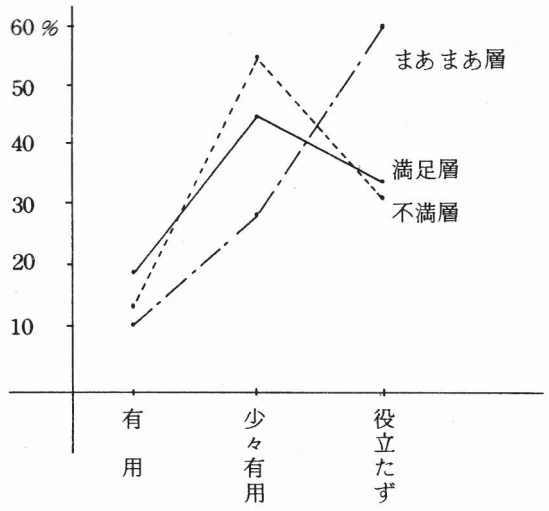
$X_0^2 = 28.681$
$P < 0.01$

印象に残った授業の有無をたずねたところ八割のひとがありと答えている（問4）。印象に残っている授業の具体的名称を調べてみると、それがきわめて多岐にわたっているのにびっくりする。少数の特定の授業が特に好まれている傾向は認められない。彼らに感銘を与える授業内容は多種多様である。そのなかに共通性を求めれば、いわゆるアカデミックな内容の授業が存外好まれていること、講義よりは演習あるいは実験実習といった形態の授業の方が印象が強烈なこと、などであろう。こうした共通特性は、いままで述べてきたことによく符号する。

授業の内容が同一でも、教師との相互作用が活発かどうかによって満足度は左右されるかもしれない。教師との人間関係を調べるために、①授業以外に卒論その他の勉学面での接触度、②勉学以外のパーソナルな接触度、という二つの面について訊ねてみた（問11）。授業満足度との関連を整理すると図9のようになる。勉学面での接触度で最も多いのが「どちらかといえば接しなかった」と思ってい

るひとであるのに対し、パーソナルな面では「ほとんど接しなかった」と思っているひとが最も多い。強弱を問わず教師と接したと思っているのが、勉学面では半分を越え五三%にのぼるのにたいし、パーソナルな面では三八%にとどまっている。明らかに教師との交流は勉学面の方が頻繁である。

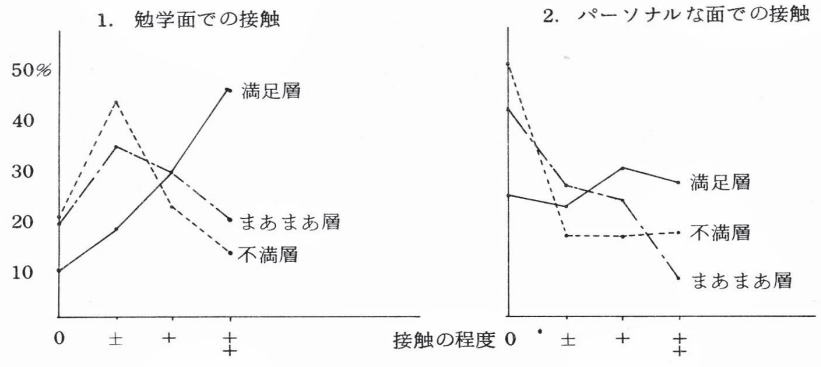
**図8　職場における有用性と授業評価**




$X_0 = 11.143$
$P < 0.05$

勉学面では、授業満足層は、まあまあ層・不満層とは全く異なる曲線を描き出す。接触度が大きくなるに従って逓増する。まあまあ層と不満層は、どちらかといえば疎遠な人を頂点に密接なひとを最低とする類似な曲線を描く。とはいえ、強弱を問わず教師との疎遠

**図9　教師との人間関係と授業評価**




$X_0^2 = 18.458$
$P < 0.01$

$X_0^2 = 14.972$
$P < 0.05$

| 接触の程度 | | 勉学面 | パーソナル |
|---|---|---|---|
| 0 | ほとんど接しなかった | 16.7 % | 38.2 % |
| ± | どちらかといえば接しなかった方だ | 30.7 | 24.1 |
| + | どちらかといえば接した方だ | 28.5 | 22.8 |
| ++ | よく接した | 24.1 | 14.9 |

を訴えている人をみると、不満層はさすがに多く六三％、まあまあ層は五二％と若干の差がある。満足層ではわずか二二％である。以上のことから窺えるのは、教師との人間関係と授業満足度との間の強い相関性である。

こうした傾向から、授業に対する不満を減少させるために教師は学生にもっと密接に交流すべきだという結論を引き出すとすれば、それは余りに単純すぎる。パーソナルな面での接触を示したグラフをみてみよう。満足層、まあまあ層、不満層、三つの層の間の差異はそう顕著ではない。不満層では、さすがにほとんど接しなかったひとが最も多いが、それをのぞけば接触の程度ごとの比率はほぼ一定である。この比率の定常性という点では満足層に類似している。これに対してまあまあ層は接触度に関して鋭敏に感応している。パーソナルな面では、まあまあ層対満足層・不満層という対比が認められる。パーソナルな交流は、勉学面における程、授業満足度の上昇にストレートに貢献しはしない。学生は教師と仲良くなったからといって授業に対して甘い評価をするようになるわけではない。勉学面とパーソナルな面、この二つの面が異なっていることをよく承知して教師とつき合っている。

教師との間にいかなる人間関係が形成されるかは、教師のあり方によってのみ決定されはしない。学生の行動および思考のあり方も重要な規定因である。主体的条件と客体的条件の相互作用の産物である点では、系の相違と同じである。事実、勉学面、パーソナルな面のいずれを問わず、教師との接触と系との相関性はきわめて高い（問11の分析参照）。所属した系の相違は、教師との人間関係という要因を媒介にして、授業の満足度を規定すると思われる。

## 3　授業評価の主体的条件

この辺で授業評価の主体的条件に目を転じてみよう。授業はどのような方針に従って選択され受講されているだろうか。系の枠にどの程度こだわっているかを基準にパターン分けしてみると、系にこだわらず興味ある授業を受講したのが五〇％、自分が属している系を中心に選択したのが三〇％、講座中心主義が一四％という比率になっている（問3）。他の系の授業を積極的に受講するようにした六％をあわせると、実に五六％にものぼるひとが「学際的」パターンに志向している。逆にいえば系とか講座とかいった制度的区分に自己の関心をオーバーラップしえた者は、五割にみたない。受講方針と満足度をクロスさせてみよう。

表6によれば、満足度は自系中心のものが最も高く、逆に不満度は「学際的」受講者に最も高い。系という制度的区分によって自分の関心がうまく被覆されているひと、それ故系に所属することに伴う満足感・帰属感が強いひとが、授業に対して満足する度合が高い。とはいえ、満足層、まあまあ層、不満層のいずれにあっても、受講パターンは、多い順に、系にこだわらず→自系中心→講座中心と並ぶ点では同じであり、またいずれの受講方針をとっても、受講者は多い順に、まあまあ層→満足層→不満層と並ぶ点でも同じであるの

で、受講方針と授業評価の関連はきわめて弱い。

授業満足度と強く相関するのは卒論という要因である。卒業論文の作成に力を注いだと思うかと訊ねると、相当力を注いだと答えた四〇％と、どちらかといえば力を注いだと答えた四四％とあわせて、実に八四％のものが卒論作成に努力したと答えている（問6）。後期課程において卒論がきわめて高い比重をもつこと、大部分の学生が意欲的にこの課題と取り組んでいることが窺える。こうした卒論体験と満足度をクロスさせてみよう。表7によれば、相当努力したという卒論体験をもつものは、満足層の方が不満層に比べて三・七倍多い。逆に、努力しなかったとの思い出をもつひとは、不満層の方が満足層に比べて三・一倍多い。卒論作成の努力と授業満足度が、強い正の相関を示すのは一見して明らかであろう。

ところで、卒論に積極的に取組むから授業に対しても好印象をもつようになるのか、それとも、授業がつまらないから卒論作成に力が入らないのか。

学生時代に何に最も力を入れたか（問10）と満足度との関連を調べてみると、満足層の比率が大きいのは、卒論重視の者（三四％）、授業重視の者（二八％）、クラブ・サークル重視の者（二七％）という順序になり、逆に、不満層の比率が高いのは、自治会活動重視者（二七％）、採用試験・資格試験準備の者（二七％）、読書重視の者（一九％）という順序になる。大学以外の試験の準備、読書は、制度としての大学が本来責任を負うべき活動ではないし、いかなる授業を行なおうとも自治会活動にとってかわることもできない。不

**表6　受講パターンと授業評価**

| 層＼受講パターン | 他系に積極的 | 自系中心 | 自講座中心 | 系にこだわらず |
|---|---|---|---|---|
| 満足 | 1.4％ | 8.6％ | 3.8％ | 10.5％ |
| まあまあ | 3.3％ | 18.7％ | 8.6％ | 31.1％ |
| 不満 | 1.0％ | 2.4％ | 1.9％ | 8.6％ |
| 計 | 5.7％ | 29.7％ | 14.3％ | 50.2％ |

$X_0^2 = 3.563$
$P > 0.50$

**表7　卒論と授業評価**

| 層＼卒論作成の努力 | 相当努力した | どちらかといえば努力した | ほとんど努力しない |
|---|---|---|---|
| 満足 | 14.6％ | 8.3％ | 1.4％ |
| まあまあ | 21.5％ | 30.7％ | 9.8％ |
| 不満 | 3.9％ | 5.4％ | 4.4％ |
| 計 | 40.0％ | 44.4％ | 15.6％ |

$X_0^2 = 16.846$
$P < 0.01$

満層は、本来大学の授業によって充足されえない価値を求める者に著しいといえよう。授業に対する不満は、実は、授業そのものに対する不満と制度としての大学に属する自分に対する不満との複合的所産ではないかと推察される。

こうした推測は、進学すべき系を決めた理由（問8）を調べても裏づけされる。満足層の比率が高いのは、系選択の理由としてスタッフの魅力をあげる人（三六％）、楽しそうだから（二六％）、学びたい講座があるから（二四％）と答えている人であり、逆に、不満層の比率は、自由な時間が多そうだから（二二％）、友人の影響で（二一％）という理由をあげている人において最も高い。友人の影響で進路を決める人や自由な時間を求める人たちを満足させるような大学の授業として、どのようなものかが考えられようか。大学という制度枠にうまく収まり切らない期待をもつ人が、授業に強い失望感を味わう。大学において卒論や授業を第一義にする者、スタッフや講座内容にひかれて進学する者――大学組織が供給しうる教育機能に期待をもつ人には、後期課程の授業はそれなりの満足を与えていると言えるようである。主体側の要因が満足度を大きく規定していることが窺えよう。

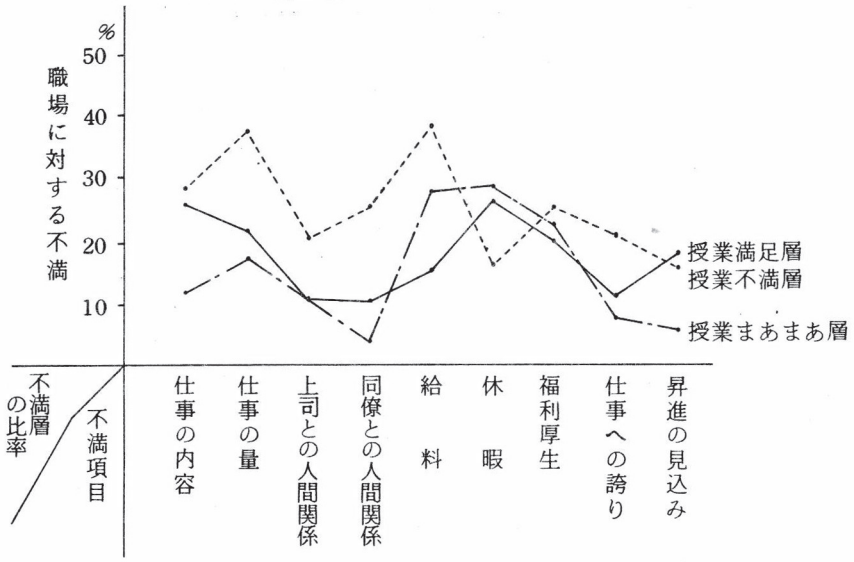
## 4　現在の状況と授業評価

今までの議論は、授業に関する回答を、過去の事実についての評価と解釈してきた。しかしここで分析されている回答は、厳密にいえば、過去の事実に対する現在の評価である。授業の体験はもはや思い出に属する。授業評価は、「授業」という過去の客観的要因ばかりでなく、現時点で回答者がおかれている状況の過去に対する「投影」であるかもしれない。

こういう観点から注目に値するのは、現在の職場に対する満足度（問16―1）と授業評価との関連である。その結果をまとめると図10のようになる。授業不満層は職場に対する不満の程度において、休暇の項目をのぞけば他の二つの層に対して常に高い位置を占めている。授業に不満を表明する人は、職場に対しても強い不満をもつ。特に第二位との開きが甚しい項目を大きい順にならべれば、同僚との人間関係（第二位の満足層の二・四倍）、仕事への誇り（第二位の満足層の二倍）、上司との人間関係（第二位を分け合う満足層、まあまあ層の一・九倍）となる。人間関係に強い不満が表明されている。授業に対する不満と教師との人間関係とが強く相関することを踏まえると、不満層は、大学においても職場においても、人間関係にてこずるタイプの人たちといえよう。

とはいえ、逆に、授業満足層が職場に対する不満に関して最も弱いわけではない。休暇の項目をのぞけば、授業満足層は授業不満層とほぼ同じパターンを示している。昇進の見込みでは、最も高い不満度を表明しさえする。職場不満度に関して一つだけ特異なパターンを描くのはまあまあ層であろう。この層は平均して不満度は低い。授業に対しても職場に対しても、まあまあ満足してしまうのがこの人達かもしれない。とはいえ、あらゆることにほどほどに満足し切っ

図10　職場満足度と授業評価




てしまうわけではない。給料、休暇、福利厚生といった功利的項目には鋭敏に反応し、かなり高い不満を示す。まあまあ層は、職場での有用性と授業評価（図3）、パーソナルな面での教師との接触度と授業評価（図9）に関して、満足層、不満層とは別箇なパターンを描き出した。学部で学んだ知識の有用性に最もきびしい評価を下し、パーソナルな面で教師と最も疎遠なのがこのまあまあ層である。以上の結果から浮かび上るのは、若干功利的で、あらゆることにほどほどに対応し、クールで適応力豊かな青年像であろう。

現在、自分で勉強していることがありますかという質問（問18）に対しても、同じように特異なパターンを示すのがまあまあ層である。表8によれば、満足層においても不満層においても、現在自分で勉強していることがある人がない人の約五倍いるのにたいし、まあまあ層ではその半分の二・五倍にすぎない。授業満足層も不満層も現在の職

表8　現在の勉学努力と授業評価

| 層＼現在の勉学状態 | 努力継続 | 努力していない |
|---|---|---|
| 満足 | 20.0％ | 3.8％ |
| まあまあ | 44.0％ | 17.7％ |
| 不満 | 12.0％ | 2.4％ |
| 計 | 76.0％ | 23.9％ |

$X_0^2 = 4.198$

$0.10 < P < 0.20$

場にかなりの不満をもちながらも、不満をバネに自分で何らかの勉強を続ける前向きの態度を堅持している点では変りはない。授業に対して満足できなかったのは、制度の枠にうまく収まり切らない希望や関心をもつからであろう。その限りで、この層は自分のおかれた状況にうまく適応できなくなりがちである。しかし、こうした不適応状態を自らの努力によって主体的に切り拓いていこうとする意欲に関しては、授業満足層に何ら遜色はない。

大学という見地に立つとき、たしかに満足層をできる限り大きくすることは大切なことであろう。しかし、だからといって不満がきわめて少ない事態が望ましいとは決していえまい。というのは、現在の大学をこえる目標をもつことに由来する不満層は決して根絶されえないし、また根絶されるべきではないからである。必要なのは、授業に対する不満と満足の質をたかめること、まあまあ層のうまい形での両極分解をはかること、と言えるのではないだろうか。